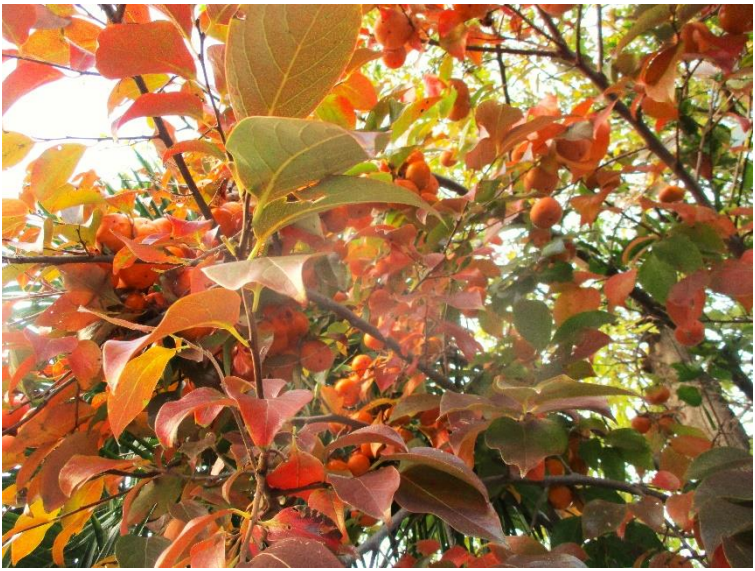
園のおたより



第　８　号

令和５年１１月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

どうぞのいす

園長　関　由紀子

　ある日、3組の前を通ると、色々な形の木の端材、板や角材、のこぎり、トンカチに釘が置いてありました。そしてその横には、絵本『どうぞのいす』がありました。「きっと3組は“どうぞのいす”を作るんだ」とピーンと来ました。『どうぞのいす』は、私の娘が小さい頃に大好きな絵本で、内容は「うさぎさんが小さな椅子を作り“どうぞのいす”と書いた立て札を置きました。通りかかったロバさんがその椅子に偶然食べ物をおくと、その後様々な動物たちが次々とやってきて、椅子に置かれた食べ物を食べて、次の誰かのために他の食べ物を置いていく」というお話です。娘は“どうぞのいす”ごっこ遊びが好きで、“どうぞのいす”の看板を立てた椅子の上に何かを置き、誰かが（私が）別の何かを置いていく様子を楽しんでいました。とても懐かしかったので3組さんの“どうぞのいす”のことを夫に話すと、一言「勧められても絶対に座るなよ」です。「どうせ私は重いですよ。はい、はい、座りませんよ。」とつぶやきました。

　『どうぞのいす』では、うさぎさんは“どうぞおすわりください”のつもりで看板を立てたのだと思います。そういえば、私には“どうぞおすわりください”と椅子を差し出してくれる子どもたちがたくさんいることに気づきました。先月草むしりをしていると、Aくんが私のおしりの下にそおっと2組さんのみどりの遊具のイスを差し出してくれました。なんと私のおしりの高さにぴったりです。夏の暑い日には、日陰に木製の重い長椅子をずるずると運んでいき、「園長先生、休んで」というBくんがいました。草むしりといいつつ、ほとんど日陰で休んでいるところを見ていたのでしょう。なんて優しい子どもたちなんでしょう。そして気づきました。『どうぞのいす』は、優しい気持ちが連鎖するお話ですが、私は子どもたちに何も返していなかったのです。今度絶対に椅子の上に素敵なものを置こうと、今ようやく誓ったのでした。

　そして、3組の“どうぞのいす”は、机、ベンチ、そして小屋の制作へと発展していきました。保護者の方のサポートをはじめ、教育学部の木育専門家の先生、附属中学校の技術の先生など、様々な方に協力を得て、頑丈な小屋が出来上がりつつあります。制作中の3組さんに「屈むから、出来上がったら小屋に入ってもいい？」と聞いたところ、「いいよ」と快諾いただきました。“どうぞのこや”のお返しに何を置こうかなあと、今から楽しみに考えています。

中学校・家庭科での学び

昨年度に引き続き、今年も附属中学校の３年生が、家庭科の「触れ合い体験学習」として、今月来園してくれました。附属中学校は各学年４クラスありますので、１クラスずつ、４日間の来園となりました。実際に一緒に遊ぶのは、それぞれ 30 分程度の時間でしたが、それまでに、幼児期の様々な発達について学び、その発達に合った遊びを具体的に考え、計画する授業を経験しています。事前の丁寧な準備があることで、幼稚園の子どもたちも喜んで過ごすことができていました。いつもと変わらない幼稚園という場ですが、中学生の存在や用意してくれた遊び道具が、特別な時間へとつなげてくれました。

現在は、中学校でも高校でも、性別にかかわらず、みんなが家庭科での学習をしていますが、私が中学生、高校生の頃は、家庭科が男女共修になる前でした。中学生時代の記憶をたどってみると、男子が自転車を逆さまにして整備の仕方を学んでいる間、女子が調理実習をしていたというようなことがありました。高校は男子校でしたので、家庭科の授業はありませんでした。クラスの教室の隣に、「家庭科室」と札のついた部屋がありましたが、日中は鍵がかかり、開くことのない部屋（当時通っていた高校には共学の定時制があったので、そちらで使っているという話）でした。みなさんは、どのような学び方だったでしょうか。

家庭科で学ぶ内容は、食に関することや衣服や住居に関すること、保育に関することなど、時代の移り変わりによって、また、社会での暮らし方によって、変化してきたようです。現在は、介護に関することやお金の使い方に関することなども、家庭科の内容に含まれるようになっています。今、幼児期を過ごしている人が、中学生、高校生になる頃には、家庭科の内容も新たなものが加わったり、大きく変化したりしているかも知れません。

附属中学校での家庭科は、おおよそ２週に１回と、限られた授業時間数とのこと。その中で、小さな子どもたちの育ちを学んだり、実際に関わったりする内容を丁寧に扱ってもらっていることを、幼児教育に携わる身としてとても嬉しく感じています。触れ合い体験学習の最後に私から、中学生に向けて少し話をする機会があったので、『児童憲章』について紹介しました。「児童は、人として尊ばれる／児童は、社会の一員として重んぜられる／児童は、よい環境の中で育てられる」、ここでの「児童」は赤ちゃんから大人になるまで全ての「こども」のことです。みんなが、児童憲章に掲げられているようなこども時代を過ごし、大人になった後は、そのようなこども時代を支える人になってほしいと願っています。

（副園長）

クラスだより

１くみ

「諸感覚から広がる遊び」

11 月は、晩夏のような日和と季節を飛び越したような寒さがかわりばんこにやって来る不思議なひと月となりました。暖かい日には進んで素足になって戸外に出ていく人もいました。足で感じる砂や芝生の感覚、風や植物の匂い、落ち葉を踏んだ時の音など、諸感覚で豊かに感じながらの生活を大切にしていきます。

最近は、いろいろな物を食べ物に見立ててお店を開き、友達とのやりとりを楽しむことが増えています。テイクアウト用に小さな紙袋を用意すると、そこに鼻を近づけてみた人が、「ハンバーガー屋さんの匂いがする」と言いました。どうやらハンバーガーショップで使われている紙袋と同じ匂いがしたようです。それを聞いた周りの人も匂いを嗅いでみると、同じように感じて驚きながらも嬉しそうにする姿がありました。そこからはハンバーガーの話でもちきりです。前に家族で出かけた時のこと、いつも食べているメニューなどを話しながら、ハンバーガーやフライドポテトを作りました。ハンバーガーのバンズの材料には紙粘土を使いました。最初はそのままこねて形を作っていましたが、「ハンバーガー白じゃないよ」と気づく人がいました。そこで、絵の具を使いこんがりと焼き色をつけました。出来上がったハンバーガーやポテトを並べ、「いらっしゃいませ」と友達や先生をお客さんにしてごっこを楽しんでいます。

遊びのイメージやきっかけはいろいろなところに転がっています。子どもたちは日々豊かに生活する中で、目で見て、鼻で嗅いで、いろいろなことを感じとり、遊びの世界に投影しているのだと気付かされた場面でした。子どもたちの気付きや、小さなつぶやきから始まる遊びをこれからも大切にしていきたいと思います。

２くみ

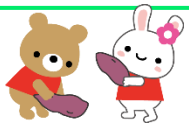
「それぞれの思い」

２組での生活も半年が過ぎ、友達と過ごす心地よさを感じる一方で「いやだ！」と大きな声で主張したり、自分の思いが通らなくて泣いていたり、そんな姿を目にすることが多くなってきたように感じます。自分の思いを知ってほしいと懸命に周りに伝えようとする姿はとても素敵なもので、「2 組」という場が安心して自分の思いを出せる場になっていることをとても嬉しく感じています。「伝えたい」「知ってほしい」という一人一人の思いを大切に、子供たちが感じている葛藤を受け止めながら、一緒に解決していきたいです。

園庭では、「氷鬼する人～！」と、友達と声を掛け合いながら登園後すぐに氷鬼が始まります。チーム分けでは、「捕まりたくないから鬼をやりたい」と自分のやりたいチームを選ぶ人、人数が多いチームを選ぶ人、安心する友達と同じチームにする人と、それぞれが「自分はこうしたいんだ」という思いを出しながら遊びが進んでいきます。そのため、チームの人数差が大きくなってしまうことがほとんどでしたが、子どもたちから思いが出るまでは見守ってみることにしました。すると、人数の少ないチームの人が「すぐに捕まっちゃうからいやだ」「もう少し“逃げ”に来てよ」と、友達に訴え始めました。初めは、そのまま遊びが進んでいましたが、その言葉に気付いた人が「じゃあ、僕がそっちにいくよ」と人数の少ない方に移動したり、「逃げをやってくれる人を探そう」と遊びに加わってくれる友達が他にいないか探すことを提案したりする人が出てきて、氷鬼をより面白く進めようとしていました。友達と思いの食い違いがあることで、友達には自分とは違う思いがあることに気付き、自分の思いとの違いに葛藤しながらも「じゃあ、どうしようか」と、自分なりに考えてみる姿が見られるようになっています。

うまくいかない経験があるからこそ、友達との関わりがより面白いものに変わっていくのだと思います。子どもたちが感じる葛藤の中で、「どうしたらいいだろう」をみんなで考えながら、うまくいかない場面こそ一緒に楽しんでいきたいと思います。

３くみ



「大豆ができた」

　枝豆がカラカラと乾いてサヤがはじけ、大豆が出きてきました。夏の初めに、大豆（種）を土に蒔いて、枝豆になった時は「え！枝豆になるんだ」と驚いていたことを思い出しました。そして枝豆が大豆になった時も「わぁ！枝豆だったのに大豆になった！」と、その時々の驚きがありました。瑞々しく青い枝豆が、時間とともに黄金色に変化をしていく様子を、目にしながら過ごしてきた人たちは、驚きとともに、喜びも一入だったようです。絵本や図鑑で見たことのある人も、知識と体験とが結びつく瞬間がたくさんありました。「あ！大豆になったんだ」と喜んで、コロンとした小さな大豆をひとつぶ手につかみ、そっと握りながら、サヤをはじいて大豆を手に取って喜ぶ姿が愛らしく、忘れられません。

　さて、遊びでは長縄跳びに興味をもつ人があります。「先生、『ゆうびんやさん』して」「『お誕生日』がいいな」と歌いながら繰り返し楽しんでいたので、学級のみんなと一緒に、やってみることにしました。その時、苦手な人が、それぞれそのことを言葉にして伝えてくれました。とっても嬉しかったです。自分のことをよく知っている人なのでしょうね。どうしてか聴いてみると、縄が上から降りてくるから怖い、跳べないから嫌だ、できないから苦手だそうです。たしかに上から勢いをつけて降りてくる縄を見たら、肩がすくんでしまうくらい怖いですね。跳べなかったら嫌だし、できないと苦手になります。

　みんなと跳んだ後、ある人が「先生、今日ちょっとしかできなかったんだ」と話してくれました。それを聴いて、どんな気持ちでいるのかも聴いてみました。「なんかちょっと悲しかった」そうです。でも「ちょっとしか・・」とは、ちょっとは跳べた、もしくは、ちょっとタイミングが合いそうだったとか、跳べるまでの嬉しい気持ちに近づいてきているということなのではないかと思い、伝えてみました。すると「えー！そうなの」と嬉しそうに友達と顔を見合わせていました。きっと次回は、期待をもってチャレンジするのではないでしょうか。

　大豆（種）が枝豆になり、枝豆をみんなとおいしく食べ、枝豆が乾いて大豆になる自然の循環から、いろいろな気付きをもらいました。自然のサイクルに感謝するとともに、信じて時期を待つことや、それまでに必要な手をかけることも、自然の事象を受け入れることも、そして、今がその時なのだと理解することも、大切なことだと思います。これって、わたしたちにも同じことが言えるかもしれませんね。

　これからまた、大豆が美味しい物に変身しそうです。何になるのでしょう。それまでの毎日も、大切にしていきたいと思います。